

鎖業界活性化へ 情報紙

題して「夢通信」。創刊を思い立ったのは、父親の後を継いで社長になった一九八四年。幼いころから、鉄を打つ音や火花、独特のにおいに慣れ親しんできたが、「取引先や友人に問われても歴史や現状がうまく説明できなかった」。文章が好きだったこともあり、PRにも役

姫路・製鎖会社
衣川良介社長



「鎖の魅力を伝えたい」。ミニコミ紙への思いを語る衣川社長＝姫路市飾磨区、衣川製鎖工業

立つと、八六年に発行を始めた。仕事の合間を縫って、国内外の文献を調べ、専門家を訪ねて国内各地を歩いてきた。業界は、いかにらないで船舶を固定する「アンカーピン」が主力製品。調べる中で遠く紀元前の地中海で外敵の侵入を防ぐために鎖で港を囲っていたというを知った。十六世紀のドイツの技術書から水のみくみ上げ道具として使われていた版画を見つけた。さらに十九世紀初めに英国で鍛造された手作りの鎖が現在のもと同型であることも判明した。

20年欠かさず発行

「鎖と人間の切っても切れない関係を表現したい」というのが編集方針。サイズはA4二枚と小さいが、カラー写真やイラストを交えて制作してきた。主に仕入れ先や出荷先四百部ほど配布してきたが、一般にも公開しようとして一九七一年にホームページ「むらの鍛冶屋」を開設した。子どもたちにも分かるように工夫し、アクセス数は七十七件を超えた。

「バイクを盗まれた」という書き込みから、盗難防止機能を盛り込んだ新製品も生まれた。衣川さんは「調査や発信を通して自分も学び、発見してきた。これからも頑張りたい」と話している。

姫路市の地場産業・鎖業界の活性化をめざして、中堅メーカーの衣川製鎖工業の衣川良介社長(左)が毎月発行するミニコミ紙が、二百五十号を超えた。自ら「鍛冶屋」と名乗り、二十年間、産地の歴史や活性化策をつづってきた。中国製品に押されて、本業の造船向け需要が落ち込む中、「先人の知恵に学ぶと再生しよう」という熱い思いに満ちている。

(浅野真紀)

切っても切れない関係表現



衣川良介

神戸新聞の地域経済の欄(9面)に主に「夢通信のことを書いた記事が掲載されました。」